

山と博物館

第38巻 第1号 1993年1月25日

大町山岳博物館



冬の不帰（八方池上部より）

白い稜線・茜色の山 写真と文 平瀬貴志

碧いのは空、黒いのは山肌、山の腹に白く堆積し、怪しく光っているのは雪。そんな形容の山姿は、やはり活動的なきかも男性的な冬姿だろう。

白い稜線は、私に早く登って来いと手招きをしているようだ。

数々の登山の中で、理想的で満足な山行は数少ない。しかし二十数年間山に親しみ、カメラのレンズを通した視界は、大きな財産であり誇りに思う。限りなく多くの事を、山から学び得たことに感謝している。

この写真は快晴に恵まれた八方池上部から一枚である。山の写真は「朝か夕方」といわれる。陽が西に傾き斜光線になりだし、雲が流れ空が少しづつ茜色になった時、計りしれない感動にかられた。

不帰は北から一峰、二峰北峰・南峰、三峰と連なり、総称「不帰の嶮」である。白馬三山から唐松岳の縦走路の中では一番の難所である。登り返す一峰は黒部川の山腹を巻いて割合楽に通過し二峰との鞍部に下る。二峰の登りが難関中の難関。両側が切れ落ちた急峻な岩稜である。

難関を突破して立つピークが二峰北峰、二峰南峰、三峰と続き、丁度この写真の部分にあたる。

そして唐松岳。東へと伸びる八方尾根は、巨大な高原の感がある。

夏には八方尾根自然研究路に沿って第一ケルン、第二ケルン、そして八方池へと登山道が続き、一般の観光客も多い。周囲にはシヤクナゲ、イワカガミ、マツムシソウなどの高山植物も豊富だ。

山や花の美しさを狙う時も、一枚一枚のコマに胸の高鳴りをおぼえる。いつまでもその時の感動を忘れず写真しつづけたいものである。

（日本山岳写真協会々員・大町市在住）

至高の安らぎを作る (上)

吉田喜義さん、テント作りの思い出

記念として

吉田喜義さん、あなたの作った天幕は、その張られた場所の高さでも、地域の拡がりでも、また強風や低温に耐えた点でも、^ま先に先人未踏の域に達しました。だからあなたこそ世界一の天幕作りだと私は思っています。

しかし、ほんとうにあなたを称えたいのは、その些も^{いかに}忽せにしない天幕作りの魂です。

多くの仲間達が、あなたが作ってくれた故に、その天幕にどんな時でも、どんな所でも、安心して生命すら託すことが出来ました。

今日^{あま}偶々、五十年の鏝骨の努力が認められて、所管の大臣から表彰されたと聞きました。

ほんとうにおめでとございます。

かつてあなたが作った天幕に寝て、青春の最も輝かしい一駒を過ぎた君達と、その志を継いで今日もなお未踏の地を追い続けている若い人達とが、集まって盃をあげ、あなたの多年の労と、その功とに報いようというものです。

吉田さん、どうか喜んでこの盃を受けて下さい。
昭和五十四年十二月十八日

盃の盃をともしにあげた一同に代って

谷口現吉 誌

(卓越技能賞の受賞にあたって贈られた)

記念の銅板より)

これは平成3年9月24日、山岳博物館で開きました吉田喜義氏(ヨシダテント会長・東京都杉並区在住)と谷口現吉氏(慶応大学山岳部OB・日本山岳会名誉会員・山岳博物館顧問・故人)の談話を中心に、毎月第3水曜日を例会日とする日本山岳会内の懇親グループ、三水会に於ける「天幕作り50年」と題する吉田氏の講演(平成元年11月15日)の一部を加えて再構成した、いわば登山用具開発史の肉声の記録である。

(文末に*印の段落は三水会記録を引用)

テント作り略歴

谷口 吉田さんを紹介すると、明治43年生まれで、たまたま僕と同じ歳なんです。大正12年に水野兼治郎商店という慶応のそばにあったテント屋さんにいわゆる昔の小僧さんで入って、丁稚さんから番頭さんになるころ、僕は遅ればせながら山登りをするようになった。僕にとつて第1号のリュックサックも吉田さんの世話になったという縁がある。

大正12年の1月に積さんが立山で遭難されたでしょう。吉田さんの記憶でいちばん生々しいのは、慶応病院で凍傷の治療を終えて退院のあいさつに店に見えた積さん達なんです。その時小僧さんの立場で、大勢ドヤドヤと偉い人達が来たのを後ろから見ていたというのが、彼のいちばんの思い出のはじまりなんです。



左から吉田氏、谷口氏、同席の丸山喜康、矢口勝義の両氏
(ともに山博嘱託員)

この店は戦災で焼けてしまったんですが、昭和18年まで奉公していました。その間に山の道具を作ってくれと、いろんな大学の学生さんがおいでになったり、学習院へは注文通りに何度も行きましたけれども、慶応は近いだけに大勢いらっしやっただんで、谷口さんはじめ皆さんよく覚えています。

昭和16年に召集がありまして戦地へ行って17年に帰ってきました。そうしたら、いつまでももそもそしていたらだめじゃないか、始めろよなんて言われまして、それで18年に新宿一丁目で自分の店を始めたんです。戦争中ですから車の仕事をしなければ商売になりませんので、三田の日本電気の下請けで軍用通信機のカバーを作っていました。

終戦後も日本電気の仕事をしていましたので、しじゅう新宿と三田を往復しているうちに、22年の秋ごろ慶大山岳部OBの狩野正秀さんと三田通りでパツパツり出会ったんです。お前何してると聞いたら、新宿でこういうことしてると言ったら、もうそろそろ山が盛んになってくるんだ、山の道具をやれよと言われました。これが山の方に切りかえるきっかけでした。それからは慶応さんや学習院さんが来る、法政さん早稲田さんが来るというわけが割合すぐに軌道に乗りましたが、これは戦前に水野で皆さんに教えていただき、信頼していただけだ、そういう基礎があったからだと思います。

谷口 昭和54年12月18日に、吉田さんは卓越技能者だといって労働大臣から表彰されたんです。その時、我々昔から世話になった連中がかなり盛大な記念会をやった。そこで吉田さんといちばん縁も深いし、集まる中で最年長だということで、銅板に刷ったものを記念

に進呈したんですよ。自分で言うのもなんですが、短かいが的確な名文だと思ってる。というのも、吉田さんがどんな気持ちでテントを作ってきたか私にはわかるわけで、吉田のテントだから安心して眠るんだという気分になつたやつらがこんなにいるじゃないかというのを諷したわけだ。吉田のテントなら安心だといながら、一生懸命に山に登つたやつがこんなにいるよという証明書だと僕は言いたいわけ。もうひとつ、息子さんが親父を大変尊敬しているというのは立派なこと、この2つを主眼に書いたんですよ。

吉田 3ヶ月ほど前に、あるヒマラヤ遠征隊の隊長さんからテントの感謝状をいただきました。若い者に、吉田のようなそんな古いテント持って行っちゃだめだと言われたが、このテントを持って行つたお陰で、ゆつくりと安心して眠れましたというんです。色々新しいテントもできてきますけれども、安心して眠れることが最も大切だと思うんです。

谷口 それは何で言つたつて吉田テントの最大の財産なんだよ。

秩父宮様の寝袋

谷口 山岳博物館にはアムンゼンが使つたというトナカイの毛皮製の寝袋がある。あとで見てもありますが、吉田さんと毛皮の寝袋には因縁があるんです。

吉田 昭和2年です。私が17歳の時ですから、佐藤久一朗さんに頼まれてね、青山御所にカモシカの毛皮をとりに行つたことがあります。秩父宮様が立山に行くんで、これで寝袋を作つてくれと言うんです。ところが当時は非常にやかましくてね、御所の門でテント屋の水野の者です、毛皮もらいに来ましたと言つたつて絶対に入れてくれないんですよ。印半天

というのがありますね、あれを着て行つたら汚ないからだめだと言うんです。仕方ないから洗いたのに着替えて行つたら、新しいものじゃなきゃだめだと言わけてです。新しい半天は染めの紺がつくから洗つて着るもんなんですが、仕方ないから新品で出直して結局3回往復してやつと4枚だつたか5枚だつたか毛皮をもらつて帰りました。

店に持ち帰ると、寝袋の形に裁断して、麻糸で斜めに手で縫つていくんですよ。当時は稲畑防水といつて非常にいい防水生地があつた。あのころ慶応あたりの山岳部の新人は店に来て、この防水生地の袋に縫つただけの寝袋と、レインコート式の雨合羽とリュックを作る。その雨合羽の生地も軍隊の将校の雨合羽の生地もこれだつたんですが、そのキレを中に全部張つてから縫うわけです。私はもちろん手伝いだけで、先輩の職人さんが作つたものをまた御所に納めに行つたわけですよ。



テント加工中の吉田喜義氏

初のヤツケ作り

吉田 昭和4年ころでしようか、学習院の山岳部にいた岡部長量さんという方にエベレストの写真帳を見せられて、中の人物が着ているのが非常に良さそうだから作れと言われました。今で言うヤツケとかアノラックなんです。とにかく見よう見まねで作つて着ていただいたんです。(*)

学習院と慶応は毎年合宿が一緒になるんですね。学習院の方がそれを着ていたものだから、慶応が見て、なんでもいいものを着てるじゃないか、どこで作つた、水野で作つたとなりまして、俺のそばなのにお前のほうが先に作つちやだめじゃないかと冗談を言つたそうです。学習院ではヤツケとかアノラックと言わないでエベ、エベと呼んでいました。私どもも名前の付けようがないのでエベレストと呼んでいました。それまではレインコート式の合羽だつたが、いつのまにか合羽は重い、エベが非常にいいということになって皆さんが着るようになった。それが今のアノラックなんです。(*)

慶大高所露営研究のころ

谷口 昭和6年ころには日本の冬山は頂上にぜんぶ登られちゃつていて、槍・穂高の1月の縦走あたりが、かろうじて残っているという状況だつた。そのころ僕はかろうじて大学に入った。

どこへ行つても、誰かが登つた後じゃつまらないなと思つていた矢先に、三田幸夫さんがカルカッタから慶応の山岳部に手紙をくれた。そこには、日本の冬山でどこでも寝られないようにしなければヒマラヤに来れないよ、という意味のことが書いてあつた。それまでにもテントは張つたけれど夏用のテントでね、



文部省南極観測隊(1985年)のテントとともに

冬に使う限りは森林の中、森林限界の下しか使えないと決まっていた。僕も縦走途中、爺ヶ岳で夏テントの支柱が折れたりなどしておりてきた記憶もあるんだけど、たまたまそういう時に、飛騨乗越とか穂高の稜線、立山の方なら平蔵の頭くらいで平気で寝られるようにならなきゃヒマラヤに来れないよという手紙がインドから来たんです。それを見て目が覚めたつていうか、大いに興奮して、しばらくの間は頂上など追いかけないで、日本中どこでも寝られるようになろうじゃないかということになった。これが高所露営研究の発端なんです。3年くらいかかって、とうとう最後には、昭和10年の1月に奥穂の頂上にまでテントが張れたわけだけども、その間ぜんぶ吉田さんの世話になつた。大失敗の赤テントもあればね、色々なテントを張りながらそこまできたわけ。

吉田 支柱は初めはアッシュでしたが、重いし、積雪で折れるというので、次はトンキン竹にしました。あれは細くても強度があった。カシの木は軍隊で使っていたけれども非常に重いですし、当時はそんな材料しかなかったんです。

(*)

テント生地でも、赤テントの時などは、赤がいいから赤いテントを作ってくれと言う。赤い生地なんてないから、わざわざ店で染めまして赤いテントを作った。ところが実際に使ってみると、暗くなると赤いテントは雪中でも見えなくなってしまう。赤テントはだめだ、失敗したと言うんです。そんなわけで、小森宮さんと谷口さんが朝に相談に来て、ああしろ、こうしろとやられてまして、テントを縫うことを覚えたわけです。(*)

谷口 僕らはね、支柱にそんなに力がかかるというのを3年くらい知らなかったんだ。逆に支柱は大丈夫でも、すみっこの縫い目がビリビリ切れるはじめたり、そんなことを2、3回やっていくわけだ。山からおりて、吉田さんこうだったよと言うと、すぐ工夫してくれて、僕が卒業するころにはかなりなところまでいってましたね。奥穂の頂上へテント張ればもう卒業だという気持ちで卒業したんだけれども、そういう歴史をせんぶ吉田さんという一人のひとと組んでやってきたわけです。

マナスルのテント開発など

谷口 僕が卒業した昭和11年くらいから雪洞も使われはじめて、テントと雪洞さえ使えばもう小屋はあってもなくても同じだといえるようになって終戦かな。終戦から8年目ですよマナスルは。28年の第一次隊には、我々のあとを継いでそれこそ吉田のテントで日本中どこでも平気だという連中が何人もいた。僕

の記憶に残る印象的なことは、三田さんの手紙を読んだ夢中になった慶応のやつがいちばん張つちやったことね。自分のことばかり言うんだけれども、20年間それが良かろうと思っていたことが証明されたような気がなつて、うんと嬉しかった。国内の山育ちでもこれだけやれるんだという自信をつけた。

吉田 昭和27年の踏査隊の当時はまったくテント生地にいいものがなく、英国のパーバリーの綿のレインコート地で従来の形に作り直した。ところが使ってみると構造の点で非常に居住性が悪い。風が強く吹くとシワができてしまつて不自由だ、なんとかもつとピンと張る方法はないかということ、その改善策として中央に竹のフレームを入れることになつたんです。

加藤喜一郎さんに呼ばれて、一緒に銀座の松坂屋に行つたんです。そこに竹で張り合わ



日本山岳会エベレスト登山隊(1970年) 3人用マナスル型テント

せたイスがあつたんです。吉田さん、これをフレームに使えばいいんじゃないか、作つているところを探せよなんて言つてくれました。調べ出したのがフレームのはじまりなんです。竹のフレームは三次隊まで使いましたが、やがて鹽になり塩ビのようなものになり、今ではポリカーボネートという軽くて強い材質に移ってきました。

(*)

生地は2次隊(昭和29年)からナイロンになりました。フランスからナイロンのテントを1張買って勉強させてもらったところ、非常に良かった。そこで加藤さんと、こういうキレがいいんだ、作れというわけで東洋レーヨンに行きました。東洋レーヨンも、その時は一生懸命やつてくれたんです。ところがいくらやつても、人絹などと同じように引つぱると横糸が滑つて寄つてしまふんです。そこで加藤さんと私は東洋レーヨンに日参したくらいなんです。その結果、今日のいいナイロンができたと思えますけれども、今は山の道具なんてものに対しちや、あまりあいうことは無いですが、当時はほんとうに一生懸命やりましたね。(*)

生地ばかりじゃありません。糸も麻糸からテトロン、ナイロン……みんな摩擦試験をやつて、結局ビニロンがいいだろうということになった。それから当時はテントだけじゃありませんで、アノラックとかオーバershユーズとか、オーバersh袋、オーバershポン、ぜんぶ作つてましたから、店のすぐそばにあつた東京都の工業試験場で、どの程度の厳しい条件に耐えるか、耐寒試験とか色々な試験も行いました。(*)

(筆写・構成 峯村 つづく)

博物館だより

展示改修にともなう閉館のお知らせ

本館内展示改修工事のため、

平成5年2月28日まで閉館中です。

ご理解ご協力のほどお願い申し上げます。

なおライチョウ・カモシカ等を飼育展示している付属園(無料)はこの期間中も開園しております。

また、閉館期間中の当館へのご連絡・お問い合わせは日曜・祝日をのぞいてお願い申し上げます。

展示改修をします

二月末完成をめどに第1展示室(1F)と第2展示室(2F)を左記内容に展示替えします。

○第1展示室

登山史関係の資料だけを重点的に展示。北アルプスの山小屋のジオラマの新設、ピッケル・海外登山の各コーナーの充実などを予定。

○第2展示室

山岳の自然・山麓の自然に絞り展示。山岳の自然ではライチョウ・カモシカを中心に生きものの達を紹介する予定。

山と博物館第38巻第1号

一九九三年一月二十五日発行

発行所 長野県大町市 TEL026-221-1111

印刷所 長野県大町市 山岳博物館

大糸タイムス印刷部

定価 年額一、二〇〇円(送料共)切手不可

郵便振替口座番号 長野四一三三二九九